

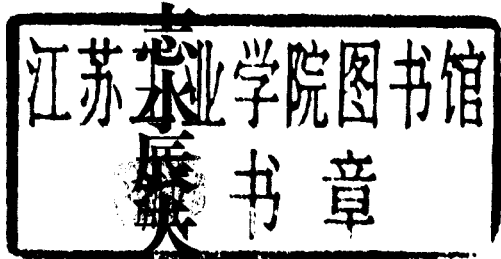
志水辰夫

Tatsuo Shimizu

情事



情事



Tatsuo
Shimizu

新潮社

情 事

著者／志水辰夫

*

発行／1997年10月20日

2刷／1997年11月10日

発行者／佐藤隆信

発行所／株式会社新潮社

郵便番号162-8711 東京都新宿区矢来町71／振替00140-5-808

電話：編集部(03)3266-5411・読者係(03)3266-5111

*

印刷所／二光印刷株式会社

製本所／加藤製本株式会社

*

価格はカバーに表示してあります。

© Tatsuo Shimizu 1997, Printed in Japan

乱丁・落丁本は、ご面倒ですが小社読者係宛お送り
下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

ISBN4-10-398602-6 C0093



情

事

装 装
幀 画
新 田
潮 渕
社 俊
装 夫
幀 装
室 幀

I

道に迷ってしまったらしい。途方に暮れた顔をしていた。そのくせ静夫の車が通りかかると、そっぽを向いてごまかそうとした。人家一軒ない山のなかだ。人目を引かないほうが不自然で、ほんとうは静夫のほうがぎよつとしたくらいだ。髪を茶色に染めていた。黄色いセーター、黒のスラックス、ボックス型のバッグ、かかとの高い靴、一見風俗系かと思われる外見だった。年はそろそろ三十だろう。

行きすぎて車を止め、内村静夫は窓から顔を出した。

「どうしました？」

「いえ、あの、ちよつと……」

口を濁した。助けが欲しいような、欲しくないような、どっちつかずの態度だが、それなりの媚

びは身につけていた。体脂肪率の高そうな肉づきのいい体軀、背丈はそれほどなく、スタイルもいいとはいえない。いわゆるぼつてりしたタイプで、顔は丸く、唇が半開きになっていた。前歯にわずかだが紅が付着している。マスカラ、マニキュア、ピアス、施せるものは全部施してある。

「なにか探しているんですか？」

うながすと、ようやく決断がついたようだ。顔を上げてうなずいた。

「あのう、この辺に、鶏小屋はありませんか」

「鶏小屋？ 養鶏場だったら、この先に、大きなのがひとつありますけど。行ったことはないんです。まだだいぶ先ですよ」

「そんなに大きいじゃないんです。ふつうの、家で飼っているくらいのも、小さな小屋なんですけど。それも、いまはやってなくて、草におおわれているみたいなんです」

備前訛りはなかった。手に紙片らしいものを持っている。静夫は車を降りて、女のほうに近づいた。なんとなくだが、女が観念したような顔をした。化粧品匂いが鼻をついてきた。衣服の下に詰まっている肉体を意識した。

地図が書いてあった。一本の川が三本に枝分かれしている。起点が吉井川で、それが吉野川、立会川へとさらに分かれる。記入されている道路は吉井川からそのまま山を越えて、立会川へ達している。ふつうだと吉野川沿いの国道を通ってくるはずだから、この辺りの地理に詳しいものを書いてたにちがいがなかった。ただしそのさきがはつきりしなくなる。この近くにある大平橋を渡って山の中に入り、枝道が何本か。一キロぐらい、という説明がつけられているだけだ。ほかにビニールハウスのある農家、鶏小屋の跡、とあって、それが目印のすべて。事務系の仕事に携わっているもの

が書いたと思われるそこそこ教養のありそうな筆跡なのに、説明のほうはずさん、なんとも大ざっぱな地図だった。

鶏小屋が目的地ではなかった。それが最後の目印で、その先から林道に入り、これを五百メートル行っただけとある。

「どこだろう？　漠然としすぎて、見当もつかないが」

静夫は地図と、女の顔とを見比べながら言った。

「それが、本人も、車で通っただけなので、うまく説明できないらしいんです。行ったらわかる、と言っただけですけど」

「これで見ると、相当な山のなかですね。訪ねた先の名前はわからないんですか」

「人の家じゃないんです。置いてきた車を取りに来たんですけど」

「車ですか？　なるほど。しかしこれだと、この鶏小屋というのを見つけないと、どうしようもありませんね」

「てっきりそこだと思ったものですから」

女は悲しそうな顔で前方を指さした。静夫の進行方向だった。それほど俊敏そうな顔ではない。

「鶏小屋がありましたか？」

「ええ。草のなかに鉄骨みたいなのが。道路からはだいぶ離れていたんですけど」

「そういうば、なにかあったな。しかし、かなり古いものですよ。鶏小屋だったかなあ」

「場所をまちがえたんでしょうか」

「だと思えます。この地図じゃわりもないけど」

地図を手にもう一度位置の確認を試みた。地図の南を上にして、起点になっている大平橋のほうへ軀を向けた。女が静夫の手のなかをのぞき込んできた。花粉のような匂いが鼻をついてきた。頭髮が顔をくすぐりそうな近さにある。襟足の奥まで見えた。

女がそういう静夫の目を意識しているとは思えなかった。警戒していないというより、そういう感覚そのものが欠けている。先ほどのためらいが嘘みたいだった。

舗装こそしてあるが、小型車がやっという幅の狭い山道だった。近くの住民が利用するだけで、抜け道にもなっていないから、交通量はきわめて少ない。そういう淋しいところで、しかも見知らぬ男とふたりきりになっているという自覚を、この女が持っているようにとは思えなかった。

「ここまで、なんで来ました」

「タクシーです。さっきの小屋がそうだと思ったから、帰ってもらったんです」

「すると、その車に乗って帰るつもりだったんですね」

「はい」

「どこから来ました」

「岡山です」

「この地図を書いてくれた人に連絡をとって、もう一度聞いてみたらどうですか」

「ええ」浮かぬ顔になった。「携帯電話なら持っているんですけど、向こうが、連絡のとれないところにいるものですから」

「友だちですか」

「父なんです」

今度は静夫が女の顔を見なおした。全体的に平べったい顔で、鼻孔がふくらんでいる。いくらか目が出て、歯並びは悪い。部分的にはどこといって形のいいものがないのに、まあ見られる顔になっているのは、化粧がうまいせいだ。

「なんならぼくの車で、この辺を一回りしてみましようか」

「すみません。お願いします」

女はほっとした体で答えた。地図を返すと、なんの抵抗もおぼえていない感じでついでにきた。そして自分から助手席のドアを開けて乗り込んできた。車のなかで女の匂いで満たされた。

「車はなんですか」

「アルトです。色は白」

静夫の車も軽だが、車種はワゴンRだった。色は黒。岡山へ帰ってきたときの足代わりとして使っているもので、二か月前に買ったばかりだ。

「それにしても、おとうさんはどうしてこんなところへ車を置きざりにされたんですか」

スタートしてから尋ねた。

「山菜を採りに来て、道に迷ったらしいんです。ようやく道路に出たら、それがまったくちがうところだったとかで。疲れていたから、そのまま帰ってきたというんです」

「いつです」

「一週間ほどまえです」

「すると、一週間ほったらかしだったんですか」

「ええ。わたし、勤めているものですから、すぐには来られなくて」

「通勤には車を使ってないんですね」

「はい。電車で通ってますから」

「だったらおとうさんが来るべきでしょうね。本人が迷ったくらいなら、ほかの人だとなおわらないですよ」

「そうなんですけど、それが、いま、入院しているものですから」

「それはごめんなさい。よいけいなことを言いました」

この辺り、標高はそれほどないものの、懐の広い山塊が連なっていて、見た目が明るいわりに鄙びたところだ。人家や耕地の大半は、吉井川とその支流の吉野川流域に集中しており、それから外れた山のなかはお定まりの過疎地になっている。人家はすべて農家、絶対数が少ないから、路上で人に出会うことはまれだ。

「おとうさん、この辺りの地理をごぞんじなかったんですか」

「そうだと思います。山にはしょっちゅう出かけてるんですけど」

「お仕事はなにをなさってるんです」

「もう定年になりました。それで、暇を持て余しているんです」

十数分、そこらを走り回った。山間を抜けたり、丘陵を横切ったり、農家の横をかすめたりしたが、鶏小屋の跡らしいものは見かけなかった。

「ありませんね」タイミングをみはからって言った。「ほかに道はないと思うんですがね。失礼ですけど、おとうさんの記憶がいじやないでしょうか。車で走っていると、意外と風景が見えないものなんです。まして交通標識も、目標物もない山のなかですから。錯覚したり、勘ちがいしたりす

るケースが、少なくないと思うんです」

「わかりました。どうもありがとうございます。もう一回聞いて、出直してきます。こんな淋しいところだとは思わなかったものですから」

「つぎは、いつ来ます」

「来週でしたら。火曜日が休日なものですから」

「じゃあそれまでに、ぼくのほうも暇を見て、探しておいてあげますよ。なにかわかったら連絡しますから、電話番号を教えてくださいますか」

女はためらった。静夫はそれを見無視して、グローブボックスに入っているメモ用紙を取り出した。結局携帯電話の番号を書き込ませた。

「お名前は？」

「どうもすみません。河内亜紀です」

「ぼくは内村静夫といいます。あなたのおとうさんよりは若いけど、それほど差はないでしょう。職業はなし、失業中です。事情があつて、いま岡山へ帰ってきているところです」

「どこから帰ってきたんですか」

「東京です。自宅があるのは神奈川県厚木というところですが」

「あ、厚木ですか。わたし、生まれは小田原なんです」

「どうりで。言葉がちがうなと思ってました。小田原には、いまでもどなたかいらっしゃるんですか」

「いいえ。もうだれもいません。内村さんは厚木のほうにだけいるんですか」

「家族がいます」

「じゃあ、単身赴任？」

「似たようなものですね。母が入院しているので、その看病ということで帰ってきているんです。といつても、完全看護だし、付添婦にも来てもらってますから、実際にぼくがすることはなにもないんですけど」

「いいなあ、厚木か」

先ほどまでとちがって、河内亜紀は急にリラックスしてきた。前に出した足が開いている。シートにだらしなくもたれかかっていた。

「岡山へは、どこから帰ります」

「来るときは、和気からタクシーに乘りました」

「そのほうが近いでしょうね。じゃあついでだから、和気まで送ってあげますよ」

「わあ、すみません。ラッキー」

「ただそのまえに、家に寄らせてください。冷蔵庫に入れなきゃならないものがあるので」

帰途についた。吉野川沿いの国道374号線に出て、吉井川まで下る。それから国道とわかれ、左岸の淋しい道を五分くらい。今宮川という小さな川があつて、そこでまた左折、山のなかに一キロほど入る。そのどん詰まり、岡山県久米郡佐田町字塩谷というところに内村静夫の生家があつた。山懐に建っている一軒家である。城のような石垣の上に築かれている。もともとこの界隈には石垣を巡らせた家が多いのだが、内村家の石垣は高さがおよそ十メートル、左右が五十メートルくらいあつて、下から見上げるとまことに威風堂々、見栄えがよかった。実体はただの百姓家だ。没落

地主の残滓といえはいいか。築八十年を越す母屋と、四つの付属建物、ふたつの蔵が、九百坪の敷地内で朽ちかけていた。使用人が十数人いたころの建物だから、使いづらいつたらなかった。さらに明治の末期、内村家が相場に失敗して逼迫していた時代に建てられた家なのでそれほど金はかけられておらず、保存の対象になるほどの造りでもなかった。

家は五百メートルくらい手前から見えてくる。石はほとんど野面積みだ。角のところだけ切り込みはぎになっていて、構造的には城郭の石垣と変わらない。正面の石段を上がっていったところに長屋門があり、その左右に土塀を巡らして、入母屋づくりの屋根や漆喰塗り込めの壁がその上からのぞくという趣向だ。赤い石州瓦が庭木や背後の山の緑によく映え、心憎い演出になっていることはたしかで、車がその家に向かいはじめたときから、亜紀の口が開きっぱなしになっていた。はじめて連れてきた人間の、こういう表情は見慣れている。五十数年前、この土地には縁もゆかりもなかった母親が、関東からはるばる輿入れしてくるようになった遠因も、祖父がこの家構えを見て、いつべんにいかれてしまったからだろうと、静夫はいまでも疑っていない。

長屋門の下へ達する道路とはべつに、手前右手から山裾を上がって行く坂道がある。もともとは大八車が出入するための道だったそうだが、いまでは拡張されて、こちらがメインストリートになっている。上がったところにある駐車場は、もと使用人の住んでいた長屋の跡だ。長屋と裏庭との境にあった板塀も取り払われ、母屋の勝手口とじかにつながっている。郵便受けや新聞受けのボックスも、いまだではこちら側の軒下に設けられていた。

黙って坂を上がつて行き、駐車場で車を回してから止めた。

「一、二分待ってくださいか」

エンジンも止めずに車を降りた。後部座席に置いてあったビニール袋を手にも、裏庭へ入る。出かけるときはなかった雑誌が郵便受けに入っていた。母が購読している短歌誌だった。ほかにだれか来た形跡はない。鍵を使って戸を開けると、そこが土間。いま使っている客間のほうへは、土間をまるまる横切つて行かなければならない。

ビニール袋の中味は発泡スチロールの箱で、千ミリリットル入りの牛乳瓶が入っている。叔母の寛子のところからもらつてきた牛乳だった。彼女はいま残っている父親の唯一の直系で、ここから車で三十分ほどの距離にある大原町で牧場を営んでいた。こちらへ帰ってきている間、入院ちゅうの母親のために、週に一回、ジャージー種の牛乳をもらいに行っていた。じつはきょうもその帰りだった。

牛乳を冷蔵庫に入れて車に戻った。亜紀はやや不安そうに静夫の戻りを待っていた。田舎の家に慣れていない人間には、古さと静けさとはそのまま気味悪さにつながってしまうのだ。

「すごく大きな家ですね」車を出すと、ほっとしたみたいに言った。「ちよつと怖かったわ。だって、全然物音がしないんだもの」

「はじめて連れてきた人は、たいていびつくりしますね」

「いまご家族は何人なんですか」

「母がひとりで暮らしてました」

「えー、信じられない」

「子どもが三人いるけど、だれも家に残ってやらなかった。かといつて、こればかりはしょうがなくてね。家も古いし、場所も辺鄙だし、いまの時代に合うものがないんです」

「でもあんなに家が大きいと、お掃除するだけでも大変でしょうね」

「使わないところは、放ったらかしですよ。ぼくが帰ってきている間くらいは雨戸を開け放すけど、建てつけがずいぶん悪くなってきました。そのうち開かないところがでてくるでしょうね」

「おかあさんはどこに入院されているんですか」

「岡山市内の、国立病院です。あなたも岡山市内ですか」

「はい。舟橋町ですけど」

と言われても、すぐにはぴんときなかった。岡山の人間にはちがいないのだが、岡山の事情にはきわめて疎いのだ。

「ご自宅？」

「いいえ。マンションを借りてます」

「ご家族は」

「父とふたりです」

「さっき、たしかおとうさんは入院中とおっしゃったが、どこの病院ですか」

「高柳病院というところです。備中高松駅の近くです」

むろんその病院も知らない。備中高松くらいはわかる。岡山から吉備線に乗って五、六駅行ったところだ。秀吉の水攻めで有名な高松城がむかしは田んぼのまん中にあった。いまでは市街地に取り囲まれて、道路からも鉄道からも見えなくなっている。

「どこがお悪いんですか」

「いえ、ちょっと足を怪我したものですから」

やや歯切れが悪かった。

「あなたのお勤めは？」

「一番街のジルというお店です」

一番街というのは、岡山駅の地下街につけられている名前だ。たしか三番街まである。ファッション関連の店が多いから、彼女が勤めているのもたぶんそういった店だろう。そういえば、マヌカンという言葉がびつたりの容姿だった。

ふたたび吉井川を下りはじめると、途中からまた国道に戻って道がよくなる。和気までかれこれ二十分の道のりだ。以前は和気から柵原^{やなはら}まで、吉井川沿いに片上鉄道が走っていて、帰省するときはもちろん、岡山へ出るときも、すべてこの列車を利用していた。廃止されたのは十年くらいまえで、交通機関としてはとうに役目を終えていたにもかかわらず、地方の私鉄としては最後まで頑張っていた。いざなくなってしまうと、過疎化の進行やこの土地の生彩を欠くのに、さらに拍車をかけてしまったことがよくわかる。

岡山までの距離からいえば、山陽線の和気へ出ようが津山線の建部へ出ようが大差はなかった。列車の本数が圧倒的にちがうから和気を使うことが多く、静夫も帰ってくるたび、岡山で乗り替えて和気からタクシーに乗っていた。ただし駅前が狭いから車を長く止めておくことはできない。車は探してあげますから、と念を押して亜紀を降ろすと、すぐ引き返した。

自宅ではなく、さつき亜紀と出会ったところへ直行した。正確には先ほどのところを突っ切つて、なお一キロくらい行つた。そして簡単に見つけた。

鶏小屋ではなく、豚舎の廃墟だった。いつごろのものか定かでない鉄骨の残骸が、道路脇に一棟